

聖火が浪江に ~明るい希望の火をともし~

3月25日、「東京2020オリンピック聖火リレー」が浪江町で実施されました。

ギリシャで採火された聖火が大熊町から受け継がれ、スタート地点の「浪江小学校」に。

第一走者の池田泉さんは、`オリンピック史上初めて、水素を燃料とした聖火リレートーチを掲げ、軽快にスタート。`トーチキス、で聖火を受け継いだ第二走者の渡邊聖子さんは、沿道の声援に笑顔で手を振って応えながら走り、町内最後の`トーチキス、へ。第三走者の片寄貴昭さんは、応援の大漁旗がはためくコースを進み、ゴール地点の「道の駅なみえ」へ。ゴール手前からは、`サポートランナー、の「なみえ創成小学校」の児童たちと一緒に走り、大きな拍手に包まれながらゴール。無事に、聖火を南相馬市に受け継ぐことができました。



聖火が、第一走者・池田さんから第三走者・渡邊さんへ



満面の笑みで手を振る渡邊さん



地元の有志が、沿道を花で装飾



そして、第三走者・片寄さんへ



浪江町請負 請戸漁港の関係者約20人が、大漁旗を掲げて走りの後押し



サポートランナー、と共に、いよいよゴール

思いをつなぐ
思いが繋がる



ゴール地点で、聖火の炎は無事「ランタン」に

当日の様子はこちら
「なみえチャンネル」



聖火リレー第一走者を務めて 池田 泉さん

●プロフィール

浪江町出身。幾世橋小学校時代にスポーツ少年団で始めたソフトボールを続け、強豪校・浪江高等学校に入学し全国大会に出場。大学卒業後は県内で高等学校教員に。震災時は、母校・浪江高等学校の教壇に立っていた。今年4月から相馬東高等学校に勤務。

●聖火ランナーに応募した理由は

「浪江町を忘れてほしくない」という気持ちがあり、以前から`そのために自分に何かできないか、と考えていました。職場である高校の同僚や、今も続けているソフトボールを通してつながった仲間たちからの後押しもあり、聖火ランナーへの応募を決めました。

正式に選ばれたときは、「まさか」という驚きと同時に、「浪江のために走ることができる」という喜びがありました。

●聖火リレートーチを持った瞬間は、どのような気持ちでしたか

初めて持ったときは、「片手で持てないのではないかと少し不安になるほど、ずっしりと重かったですが、`浪江町の水素、を利用した聖火リレートーチの重さは「未来の重さ」「明るい重さ」でもあったと感じましたね。

●コースを走っているときは、どのような景色が見えましたか

沿道から多くの方が応援してくれている姿が見えました。中には、友人や教え子も駆けつけてくれていました。`コロナ禍、でリレーを走ることに、複雑な気持ちは消えませんでした。聖火リレーを通して、浪江町にたくさんの方が来てくれたことがとてもうれしかったです。

●走り終えた感想を教えてください

応援に来た友人や教え子が、聖火リレーの後に「道の駅なみえ」で浪江町の地酒や食品などを購入してくれたようで、たくさんの方の感想が届きました。「また浪江町に行きたい」と言ってくれたときは、「聖火ランナーを引き受けてよかったな」と思いました。

震災の影響で、子供たちが戻らないまま閉校となった浪江小学校から、`復興のシンボル、「道の駅なみえ」まで、聖火ランナーを通して、現在のありのままの浪江町を、町内外の人たちに知ってもらおうきっかけ作りができたのではないかと考えています。

浪江町産、水素の聖火初披露

浪江町を駆け抜けた聖火リレー。聖火ランナーが掲げた聖火リレートーチには、「福島水素エネルギー研究フィールド」(棚塩産業団地内)で製造した水素が燃料として使われました。

同施設の水素は、製造の段階で二酸化炭素を排出しない`クリーンなエネルギー、であることから、国が進める「脱炭素社会」実現の切り札として注目されています。

なお`浪江町産水素トーチ、は、浪江町内を走った3人のランナーをはじめ、3日にわたり行われた福島県内の聖火リレーにおける各日の最終走者も掲げて走りました。



世界初、の聖火リレートーチを手に

「標葉郷騎馬会」聖火リレーの先陣を切る

国の重要無形民俗文化財の指定を受け、馬の祭典とも称される「相馬野馬追」。

3月25日、浪江・双葉・大熊町の会員で構成される相馬野馬追の「標葉郷騎馬会」から12人が、甲冑や陣羽織を身にまとい「東京2020オリンピック聖火リレー グランドスタートセレモニー」(Jヴィレッジ(檜葉町))に登場。

野馬追の騎馬武者行列の出発時に吹奏するほら貝で、聖火リレーの`出陣、を世界に宣言。勇壮なほら貝の演奏などにより、会場は大いに盛り上がりました。



豪華絢爛な騎馬武者姿が会場を魅了

Photo by Tokyo 2020